

# 『杜騙新書』と南方熊楠

閻 小 妹 氏 岡 真 士

## 1.

南方熊楠（1867～1941）に「西説婦女杜騙経序品」という文章がある（『熊楠漫筆—南方熊楠未刊文集—』八坂書房、1991年）。1912年に『牟婁新報』に連載され未完に終わったというから、すでに紀伊田辺に居を定めたのちのことになるが、この題名に「杜騙」とあるのが目を引く。

内容自体は、いわゆる初夜権に関するものである。

欧州<sup>ダークエージ</sup>闇黒時代には、「キサーン」（股の権）とて、婦女をまるで足袋か糠袋のごとく蔑視し、ドイツ、スコットランド等で、人が新婦を迎うると、初夜、また初めの数日間、その地の領主の側に臥させ、その試験を経た後でなければ、夫の手に入らず、「吾物にして吾物ならなくに」と嘆ぜしめたが、コラン・ド・プランナーの『封建類典』に拠るに、追い追い悪弊が生じ来たって、このことは止んだ、代りに新婦試験の免税を出す風は、百年ばかり前まで所々に存した。

そして南方は更に、東洋ではどうかといった内容について諧謔を交えつつ、以下おもに大蔵経から関連のエピソードを紹介している。関連の言説は、「鶏に関する伝説」4（『十二支考（下）』岩波文庫、1994年）などにも見える。

さて題名の「杜騙」であるが、じつは南方熊楠の蔵書のなかに『杜騙新書』がある。これは明末の短編小説集であり、詐欺などの事件を描く作品を手口別に分類している。

「杜騙」とは騙しを杜絶させる、という意味で、全84話のほとんどに読者へ警戒を呼びかける評がついている。日本でも江戸から明治にかけてよく読まれたことが明らかになっている（伊藤加奈子ほか『「杜騙新書」訳注稿初編』、『杜騙新書』の基礎的研究プロジェクト、2015年）。とすれば初夜権も婦女を犠牲にする一種の詐欺ということになるだろうか。

われわれは和歌山県の田辺市教育委員会と南方熊楠顕彰館の関係各位にご配慮をいただき、この蔵書を調査することができた。感謝の意をこめつつ、以下に知見を述べたい。

## 2.

蔵書目録には以下のように記されている。

『南方熊楠邸蔵書目録』（田辺市、南方熊楠邸保存顕彰会、2004年）

〔新刻〕杜騙新書

明・張応兪 2巻2冊 和装 原著は1617、漢沖張懷耿刊 江戸時代の和刻本が  
原本か 写本 27.2×18.5 書入多

ここでいう「江戸時代の和刻本」とは、けして周知の一巻十七話本『江湖歴覧杜騙新書』のことではあるまい。この写本二巻は明刊本全四巻の前半に相当する内容だが、直接的な底本は未知の和刻本である可能性をもつため、このような表現になったのであろう。

この写本の版心下部には「文刻堂」と書かれている。中国にこの名の本屋があるとは寡聞にして知らないが、江戸時代の日本ではその活動が有名である。

『浮世風呂』の版元となった日本橋<sup>どおりほんちょう</sup>通本町の文刻堂西村屋源六は享保年間に創業した本屋だが、……おびただしい蔵板数を持ち、『徳川時代出版者出版物集覧』には、当時としてはかなり多いほうの約一七〇点があげられ、なかには芭蕉や蕉門俳人の俳諧書がかなり多く見出される。出版書目は比較的硬派本、つまり物之本が多い。たびたび書物問屋の行事を勤めているから、当時の版元中では名門の中に数えられていたのであろう。（鈴木敏夫『江戸の本屋（下）』中公新書、1980年）

京都の西村市郎右衛門の縁故の者と思われる西村源六は、京都西村家が書物屋をやめても、栄えて幕末に及ぶ。西村源六は、上方従属の商売から、江戸で自立しえたが故に残ったのであろう。（今田洋三『江戸の本屋さん』NHKブックス、1977年）

式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』は文化六年（1809）に前篇二冊が出ているが、そのころ西村源六は書物問屋と地本問屋を兼業していたらしい（文化五年、『江戸の本屋（下）』所引『外題作者画工書肆名目集』参照）。さかのぼれば享保十二～十六年（1727～1731）の5年間だけで40冊以上の新版を取り扱っている（『江戸の本屋さん』）。

そこで改めて『徳川時代出版者出版物集覧』pp. 181-183（矢島玄亮著、1976）、『同続編』p. 68を確かめてみると、文刻堂から196種類の書物が出版されたことが分かる。その出版の期間は、古いものでは元禄七年（1694）と記される『はせを翁十六編』もあったようだが、おそらく実際は享保年間（1716～1736）の後刷りだっただろう。そこから文化十二年（1815）の『早引節用集』までが挙げられているが、近年のインターネットの普及で国会図書館所蔵の天保七年（1836）『掌中武藏國輿地全圖』もそのリストに追加できることが判明している。ともあれ江戸時代の約百年間にわたって、文刻堂が出版に関わっていることが分かる。

文刻堂の活動時期前半における出版状況を反映しているものとして、寛延四年（1751）の俳諧書『續五色墨』（愛知県立大学図書館 貴重書コレクション）の巻末に附された「文刻堂蔵板目録・文刻堂寿梓目録」を挙げることができよう。その中にはすでに127種の書名を並べていることから、出版数の半分以上は前半に集中していることがわかる。とくに「文刻堂蔵板目録」というものが俳諧書の後ろについていることが多く、天明元年（1781）序の『七柏集』（早稲田大学図書館）や文化十年（1813）刊と目される『蔦本集』（早稲田大学図書館）の奥書で「俳諧書肆」と自負するように、俳諧方面を中心とした出版物が多かった。

つまりこの文刻堂による「江戸時代の和刻本」の存在を、『南方熊楠邸蔵書目録』は想定していると解釈できる。もしその想定が正しければ、既に散逸した文刻堂刊本の面影は南方熊楠のおかげで今に伝えられていることになるだろう。

ただし、俳諧書以外の、より固い内容の書物（いわゆる「物の本」）に目を転じると、

釋親考 伊藤長胤著；安原貞平 27.5×18.9cm 江戸，享保20 [1735] 序. 文刻堂（香川大学附属図書館）

論衡 寛延3年（1750）西村源六（金沢市立玉川図書館近世史料館）

日本伝守行矩 健高貞山正英 1冊；27.0×17.2cm 江戸，宝暦12 [1762]. 西村源六（九州大学附属図書館）

などがあるが、これらの出版物の巻末には「文刻堂蔵板目録」の類が見られない。

また、和本の場合は匡郭も版心もないものがふつうであるのに対して、和刻本の類の出版物は外観上、中国の刊本に準ずるものが多い。たとえば、寛延三年（1750）刊と目される『易道撥乱弁』（早稲田大学図書館）や宝暦二年（1752）刊の『春台先生文集』（京都大学附属図書館）のように、いわゆる漢籍や準漢籍には、匡郭も版心もあり各行に界線が引かれている。そして版心は「〔書名〕〔黒魚尾〕〔巻数〕〔葉数〕〔文刻堂〕」となっていて、問題の写本『杜騙新書』と似ている。ただ、これらは多くが半葉9行のものであって、写本『杜騙新書』のような半葉10行ではない。

文刻堂の出版物のなかには、各行に界線が引かれていない点はちがうが、半葉10行のものもある。延享元年（1744）刊の『伊呂波童蒙抄』（早稲田大学図書館）は、版心の〔文刻堂〕の上に写本『杜騙新書』と同じように「○」がついている。ただし〔黒魚尾〕が入っていない。

ほかに文化八年（1811）刊の『斷毒論』（早稲田大学図書館）は半葉10行で界線もあるが、版心の下が「竹蔭醫寮藏」となっている。「文刻堂」をはじめ四家連名で出されたからであろうか。

総じて、文刻堂の出版した漢籍関係の書物は漢詩集や経典の注釈などが多く、『杜騙新書』のような教訓じみた小説の類が見いだせない。しかも写本『杜騙新書』のような「〔黒魚尾〕○〔文刻堂〕」といった版心を持つ、10行界線入りの刊行物も現時点で1点も発見されていない。

以上のようなことから推し量ると、文刻堂は刊本としては『杜騙新書』を出版しなかったものの、「文刻堂」の名入りの用箋をつくっていた可能性がある。『和本入門』『江戸の本屋と本づくり一統 和本入門』（いずれも平凡社ライブラリー）などの著書をもつ誠心堂書店の橋口侯之介氏のご教示によると、写本用に罫線を入れた用箋はいまの原稿用紙のようなもので、当時よく作られていたという。

好事家が他のテキストを書写する際に、何らかの理由で版心下部に「文刻堂」と書いてみた可能性も否定できないが、とはいえ各葉の罫線の欠落やかすれ具合が酷似していること、また第二巻末尾に罫線のみで2葉をわざわざ附している点は、前者の解釈に有利に働くであろう。

にわかに結論は下し難いが、しばらく以上の仮説2つを挙げておく。

### 3.

改めてこの写本の特徴を記してみよう。『南方熊楠邸蔵書目録』に「27.2×18.5」とあるのは本全体のサイズで、匡郭は21×16センチである。各行に界線が引かれ版心もあるため、明刊本と見まがいかねない外観だが、半葉10行毎行20字だから目録や本文の場合は明刊本より1行多くなっており、その分だけ葉数が節約されている。

また版心は、明刊本が「杜騙新書〔黒魚尾〕〔巻数〕〔葉数〕」という体裁を採るのに対して、写本はこれらを記さず、とくに葉数が記されるべき個所は「○」となっていて検索に不便である。その下に「文刻堂」の3文字を記すが、愛読の結果だろうか、すりへっている葉も少なくない。

全体の構成だが、まず「叙江湖奇聞杜騙新書」から始まる。ここは明刊本に比べて崩した書き方で文字を詰め込んでおり、行数も明刊本の半葉8行より2行分多いため、半葉少なく2.5葉で終わっている。次に目録が2葉。巻三と巻四の記載が無いため、明刊本の4葉の半分である。また明刊本の場合、各巻本文の最初の半葉は扉絵と賛が占めるが、写本はそれが無い。

そして本文の最初の行に、それぞれ巻之一ではなく「巻之上」、巻之二ではなく「巻之下」と書いてある。また巻末は「上ノ巻」、「二巻」である。これは目録が「一卷」「二巻」とする点も考え合わせると、本来の数字を上下に書き換えたとみてよい。

これは、書写者の小細工ではないだろうか。もし四巻本の前半だけを上下二巻に仕立て直した和刻本がかつて存在したとしても、このような初歩的なミスを犯したまま校正もされずに刊行に至るとは考えにくい。いっぽうこの写本の本文は、本稿末尾に具体的に挙げるように誤字の類が目につく。それはこの写本に限らず、写本一般の通弊であるにせよ、複数の人間が分業する刻版に比べると、単独作業の限界は免れがたい感がある。

ところでこの写本は、日本に伝わる他の写本と興味深い共通点が2つ見られる。まず「書林漢冲張懷耿粹」と本文各巻初めに記していることで、他の写本にもこの5文字はある。しかし今に伝わる明刊本ではいずれも「漢冲張懷耿」の5文字を空格にしているのである。

つぎに巻二19bの第9行と第10行についてである。ここは一見、18bから始まる「私打印記占鋪陳」という話の評語が書かれているように見える。しかし実は第9行で「私打印記占鋪陳」の評語（「……三緘其口而慎其言」）は途切れ、第10行には「膏藥貼眼搶元宝」という話の評語の最後の1行だけ（「此凡有銀在身者……」）が記されている。つまり、この写本では「膏藥貼眼搶元宝」という話がほぼ丸ごと抜けて、

次の「石灰撒眼以搶銀」に繋がっている。これは明刊本でいえば巻二22 a b 計18行分が脱落しているのである。そして国会図書館蔵本をのぞく3つの写本(国立公文書館、東洋文庫、筑波大学所蔵)においても、この部分は記載が無い。ちなみに国立公文書館と東洋文庫の写本は該当部分が一葉空白になっているのに対して、筑波大学の写本だけは、この写本と同じく直ちに書き継いでいる。

このことが何を意味するか、みだりな憶測は慎むが、ただこれらは日本における『杜騙新書』の流伝を考えるうえで、留意すべきポイントであることは間違いない。

#### 4.

この写本には、南方熊楠の蔵書印や書き込みがいくつかある。以下に関連事項も含めて書き出し、※印をもってコメントを付す。「/」は改行を示す。

序1 a 右上：

「南方熊楠蔵書之印」

二冊本

※後人によるか

序1 a 右下：

明治十八年六月六日購 南 熊

此卷末ニ江戸四日市古今珍書

僧達磨屋五一ノ印有リ (大正八年

十二月二十二日記)

※1885年に購入し1919年に追記したことになる。それぞれ数え十九で大学予備門の学生だった時と、紀伊田辺に暮らす数え五十三の時のことである。ちなみに冒頭で紹介した「西説婦女杜騙経序品」が書かれたのは、1912年であった。

序3 a 左上：

1617A. D. 元和三年也

※「万曆丁巳年」への注記。

本文42 b 左下：

四十六枚

※第一冊の末尾。序2.5葉・目録2葉・本文41.5葉で計46葉だが、ただし話の途中、「卷之上」の途中である。第二冊の2 a で話も巻も終わり、2 b から「卷之下」となる。

本文第二冊1 a (通算43 a) 右上：

「南方熊楠蔵書之印」

※後人によるか

本文二3 b 眉批：

陀々花乃三年／茄花トアレド／曼陀羅花ノ／事ナラン

※「陀々花者乃三年茄花也。人服此則昏迷不能語」への注記。

本文二14 b 眉批：

現銀 (ゲンキン)

※本文の語を抜き出して振り仮名を付したものの。

本文二22 b 眉批：

寧作貧人妻／莫作貴人妻

※本文の語を抜き出したものの。

本文二36 b 眉批：

妓名花不如

※本文の語を抜き出して説明を加え傍線を引いたものの。

本文二46 b 左下：

江戸四日市／古今珍書儉／達磨屋五一

※目利きとして知られた19世紀の江戸日本橋に存在した古本屋の朱印。

本文二46 b 左下：

四十七枚メ九十三枚

※第一冊46葉＋第二冊47葉＝93葉。

これらのなかで一際興味を引くのは、巻二3bの眉批「陀々花乃三年／茄花トアレド／曼陀羅花ノ／事ナラン」である。この前後には「炫耀衣装啓盜心」（第26話、八類「露財騙」）という話が記されていて、それは船に乗った游天生という旅商人が、立派な衣装を持っていたばかりに、船頭に一服盛られて昏睡し、川へ突き落されてしまう事件を描いている。ここで船頭が酒に混ぜたのが「陀々花」であり、これについて本文で「陀々花なる者は乃ち三年茄花なり。人此れを服せば則ち昏迷して語る能わず」と説明している。ところが南方熊楠は、「茄花」というが「曼陀羅花」のことであろう、と注記しているわけである。

このあたり本草学にも造詣の深い南方熊楠の面目躍如という感があるが、じっさい彼は「樟柳神とは何ぞ」のなかで曼陀羅花について詳述している（『《南方熊楠コレクション》第三卷・浄のセクソロジー』河出文庫、1991年）。

『本草綱目』一七、押不慮の次に曼陀羅花有り。……さて『本草綱目』の曼陀羅花は、木でなく毒草だから、仏が持ったとか極楽を莊嚴するとかいう曼陀羅花（すなわちデイゴ、漢名刺桐）とちがう。また『本草』の曼陀羅花は、独茎直上四、五尺とか白花を開くとか、まるでマンドラゴラの茎ほとんどなく、花紫なるに異なり、決してマンドラゴラでない……従来邦人がチョウセンアサガオに当てたを正しと証する。（〔著者書きこみ〕 チョウセンアサガオ（ダツラ）属は、マンドラゴラ同様、茄科の植物で、両半球の熱地に産し、すべて十五種あり。本邦にも二種が植えられ、一種が帰化したという。いずれも麻醉性あって毒物なり。インドでも、盜賊これをもって人を昏迷せしむ。姪婦は、ひそかにこれを飲食に混じて夫を毒し、その眼前で奸を行なうも、夫さらに覺えず。主婦の苛酷を怨む奴婢は、それをもって主婦を失神せしめ、自分に金をくれた人に主婦を犯さしめ、妊娠せしめたすらありという。……）……押不慮のみが、マンドラゴラの漢名と断言しておく。

なお紛らわしい名前のマンドラゴラについては、最近では佐立治人氏の研究があり、南方熊楠の他の論文にも検討を加え、また曼陀羅花にも言及している（「中国のマンドレイクー死んだふりをして罪を逃れた話ー」、『関西大学法学論集』第65巻第2号、2015年）。

さて『本草綱目』巻十七の曼陀羅花の項を見ると、「釈名」として風茄花・山茄子といった異名が記され、また「集解」として「葉は茄葉の如し」という指摘がある。そして「發明」には毒性に関して以下の記述がある。

相傳此花笑采釀酒飲、令人笑、舞采釀酒飲、令人舞。予嘗試之、飲須半酣、更令一人或笑或舞、引之乃驗也。八月采此花、七月采火麻子花、陰乾、等分為末、熱酒調服三錢、少頃昏昏如醉。割瘡灸火、宜先服此、則不覺苦也。

(伝えるところではこの花が咲(=笑)いたときに採って酒を醸して飲めば、飲んだ人は笑い出すし、舞い散るのを採って酒を醸して飲めば、飲んだ人は踊り出す。私は試してみたが、ほろ酔い加減になる頃には、もう一人が笑ったり踊ったりしていたので、この例を挙げればそれが証拠になる。旧暦八月にこの花を採り、七月には火麻子花を採っておいて、陰干しし、同量を粉末にして、熱燗に0.3両(約11g)溶かして飲むことで、やがて酔ったように昏睡する。皮膚のできものを切ったり灸をするときには、まずこれを飲んでおけば、苦しくないのでよい。)

ちなみに七月に採るといふ火麻子花は、大麻の雌花穂のことだといふ(『大麻』厚生省薬務局麻薬課、1976年)。

『杜騙新書』では陀々花がもう一か所、「公子租屋劫寡婦」(第31話、十類「盜劫騙」)にも出てくる。身分を偽って未亡人から部屋を借り、お礼に酒宴を開いて子供や召使いまで昏倒させ、家財を盗み去る話である。ここでも酒に陀々花を混ぜているが、写本の該当箇所(巻二15b)に書きこみは無い。

なお陀々花については曲亭馬琴も関心を持ち、『弓張月』や『八犬伝』などいくつかの作品に生かしている。崔香蘭『馬琴読本と中国古代小説』(溪水社、2005年)に詳しい。

字句の異同の詳細については、付録として末尾に記しておく。

## 5.

江戸時代の写本の位置付けについて、誠心堂書店の橋口侯之介氏は「成蹊大学日本探求特別講義2012年後期〈江戸の本づくり第9回 メディアとしての写本〉」において以下のように述べる。

江戸時代までの写本は、版本と同列に書物として扱われてきた。装訂も同じように仕立てられた。書いたものを、簡単に綴じておくという程度ではすまらず、版本と同じようにきちんと周囲を断裁して袋綴じにし、さらに表紙をつけたのである。版本と違うのは、その表紙に手書きの題簽を貼るくらいで、一見しただけでは、版本なのか写本なのか区別ができないほどである。それは、写本も版本も同

じように伝存することを念願したからだ。実際、写本もそのまま残され、蔵書には版本も写本も混然と置かれたし、本屋の古本部門でも写本は重要な品揃えのひとつだった。

しかも現存する和本をサンプル調査したところ、約40%が写本だった。

南方蔵書『杜騙新書』の書写年代を考える手がかりは、この写本の巻末に捺された「江戸四日市／古今珍書僧／達磨屋五一」なる朱印である。目利きとして知られた19世紀の江戸日本橋に存在した古本屋であるこの達磨屋五一（1817－1868）について、『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、1994）は次のように紹介している。

幕末期の江戸の古書肆。名は覚、字は吾心。無物、法斎などと号す。岩本氏。書屋を美織家、待賈堂と号した。父は尾張、紀伊両家御用米の御蔵預かり、母は旗本稲村氏。12歳から日本橋の西村宗七を振り出しに書肆へ奉公に出、数軒を経る。この間、群書を涉獵し、傍ら初代花酒屋光枝に入門、花酒屋蛙麿を名乗って狂詩、狂文に遊んだ。22歳のとき、自讃の一書を残して主家を退き、居候の身となって草子類の戯作などで稿料を得たが、のち再び書肆を志し、芝の切通に露店を出した。嘉永3(1850)年に四日市に開いた店は珍書屋の名で知られ、蒐書の質の高さから好事家の集う所となった。安政4(1857)年、娘婿2世達磨屋活東子と共に、蒐集した珍書を編集し、「燕石十種」と名付けた。以後6輯まで編まれたこの叢書は、風俗に関する貴重な文献として現在も広く知られている。〈参考文献〉岩本米太郎編「瓦の響　しのふくさ」（長沢規矩也編『本屋のはなし』）

さらに、大妻女子大学文学部教授石川了氏の『古書販売目録—歴史・利用法・魅力—』（ミニ展示「古書販売目録と大妻女子大学所蔵資料」関連講演会、大妻女子大学国文学会主催、2009年11月6日）に以下の指摘がある。

しかし江戸表の古本屋はよく分かりません。あるにはあったのですが、その歴史からいいますと、江戸表の古本屋というのはもともとは露天商で、それも骨董屋さんがついでに本も持って行って露店で並べて売っていたようです。その歴史が長かったのです。大田南畝や山東京伝、柳亭種彦などは、筋違橋から浅草橋へと続く柳原の露天商で古本を手に入れたことを書き記しています。こういう古本屋の歴史があるのですが、ともかくも関西を含めて最も目利きの古本屋として著名なのは、江戸幕末期の達磨屋五一でしょう。とくに五一の集めた本に押された「待

賈堂」の蔵書印は、かの反町茂雄さんが自店の古書目録を「弘文荘待賈古書目」と命名した典拠としても有名です。

現に、日本をはじめ、イギリス、アメリカ、台湾などに、その蔵書印を捺す書物が所蔵される。反町茂雄『日本の古典籍：その面白さその尊さ』（1979）の「五 西欧に稀書をたずねて」なる一節では、大英博物館にあるキリシタン版『落葉集』（1578）を手にとって、

巻首には「待賈堂」の印、巻末に「江戸四日市古今珍書僧達摩屋五一」とした正方形の朱印があり、珍本屋として名高い達摩屋の旧蔵であることを示して居ました。「何と云う幸せだろう。これだけでも、はるばるロンドンに来た甲斐があった」と感激しました。

とその蔵書印の意味を語っている。中野三敏の『写楽：江戸人としての実像』p.202（中央公論新社、2007）にも「ほとんど現存一本のみというような稀本の類に「江戸四日市古今珍書僧達摩屋五一」のような印を捺している」とある。青木正美の『古本屋群雄伝』（ちくま文庫、2008）「第五章 古本業界の先達たち」でも、

待賈堂・達摩屋五一：蔵書印でいまでも信頼される江戸の古本屋——江戸の古本屋に達磨屋五一という古本屋さんがいて、屋号は待賈堂でした。良書を集めるために珍書とみれば待賈堂という印を押し、この本は達磨屋が見て珍書と保証した本だということで広告しました。

と言うから、「待賈堂」印こそ無いものの達摩屋五一の蔵書印を捺された写本『杜騙新書』もまた、当時から珍書と見られていたのであろう。

ところで、上記の履歴によれば、達磨屋五一は数え十二歳の時（文政十一年、1828）に西村屋宗七へ奉公した。この西村屋宗七は、じつは文刻堂の西村屋源六と深い関係にあるらしい。たとえば、文政二（1819）年一月刊『花鳥写真図彙 初編』（金沢美術工芸大学蔵）の奥付には、

花鳥図会全部十五冊内初編三冊出来嗣編毎春発行／北尾紅翠斎摸[峰][口巍居士]／割ケツ 桜木亭常春[常春之印]／文化二年乙丑正月吉辰／書林 大阪心齋橋順

慶町 柏原屋清右衛門／江戸本石町二丁目 西村源六／同三丁目十軒店 西村宗七寿梓」（終丁ウ）

とあるように、両者の名前が並べられている。しかもそれぞれの所在地を調べてゆくと、同じところに店を構えているようである。たとえば西村屋源六の所在地は、その出版物の奥付を辿ってみると、

本町三丁目（享保十一年、1726 から延享元年、1744）⇒本石町二丁目（天明元年、1781）⇒本石町十軒店（文化四年、1807）⇒本石町四丁目（文化八年、1811）⇒本石町十軒店（文化九年、1812）⇒本石町二丁目（文政二年、1819）⇒浅草黒船町

のように、文化年間には本石町十軒店となっていることが多いが、上記の『花鳥写真図彙 初編』のように、文政二年では逆に西村宗七の所在地となっていた。

昭和四十年に出版された上里春生の『江戸書籍商史』 p.113（名著刊行会、1965）によれば、「江戸書籍業者の組合組織としては、寛永年中に日本橋通り町から十軒店付近にかけての書肆を糾合してつくられた「通り町組」」のリストには両者が入っている、

通本町三丁目 文刻堂 西村屋源六  
本石町三丁目十軒店 層山堂 西村宗七

ところが「天保の株式禁停令によって問屋仲間が一斉に解散せらるゝや、書物屋関係の仲間にあってもこれが組織を解体するに至った。」（p.125）。そして「嘉永四年（1851）の問屋組合再興令によって「書籍問屋仲間」も復活した。その二年後の嘉永六年（1853）の「書物問屋」の名簿にはもう「文刻堂 西村屋源六」の名がなく、「層山堂 西村屋宗七」しか載せていなかった。

達磨屋五一が西村屋宗七へ奉公に出た際、「文刻堂」がまだ残っていたかどうかは不明だが、文刻堂の用箋で書かれた可能性のある写本『杜騙新書』を手に入れた点から見ても、達磨屋五一にとって文刻堂はごく身近な存在であったかもしれない。

ちなみに明治以降にも「文刻堂」による出版物があったが、それは別物で、所在地は京都だった。たとえば、奈良女子大学附属図書館所蔵の『日本略史』は、「明治十五年一月[京都] 文刻堂翻刻 陸軍省御蔵板」とされている。ほかにも『小学句読：新

刻改正』（晦菴 編、陳選 句読、後藤芝山 点、京都文刻堂、1884）などが出版されている。

最後に、この写本の成立時期に関わる情報を、時間軸を遡るかたちで整理しておく。

【1885】南方熊楠購入 書きこみ：「明治十八年六月六日購。南熊」

【1850～1868】達磨屋五一所蔵

印記：「江戸四日市古今珍書僧達磨屋五一」

達磨屋五一は嘉永三年(1850)に店開き、1868年没

【1853】版心に見える「文刻堂」営業時期の下限

嘉永六年(1853)の「書物問屋」名簿に文刻堂が見えない

確認できる最後の出版物は1836年『掌中武藏國輿地全圖』

【1716～1736】文刻堂は享保年間に創業

この期間のものとして南方蔵書『杜騙新書』と同じような体裁の用箋や刊本・写本を見出すことが、課題のひとつとして残る。

## 6.

もうひとつの課題として、テキストの性格を掘り下げるためには、これまで便宜上一括して明刊本と呼んでいた諸本の精査が、別途必要になる。また諸写本の再検討も必要になるだろう。

付録として、末尾に明刊本との異同および優劣を示したが、これも不断の検証を要する。いわんやその意味するところをや、である。たとえば『杜騙新書』明刊本と南方本の異同のうち、下記の巻二「詩詞騙」第一話「偽粧道士騙鹽使」と第二話「陳全遺計嫖名妓」にある計三か所、

40 b 9 亦>又

42 a 7 云>曰

43 b 2 無>不

のような明刊本>南方本の違いは、これだけでも写字生のレベルを知るに足るであろう（ちなみに通行の和刻本（一卷十七話本）における上記三か所は明刊本と同じである）。ただしこれだけをもって単なる写し間違いではなく、また恣意的に改ざんした

ものでもなく、むしろ異なるテキストの存在を物語るものとまで言えるかどうかは、別の問題である。

とくに三番目の例は「無」と「不」を取り違えており、和臭の謗りは免れがたい。しかもこの場合は前後が「悔無及矣」という表現であって、「既而悔之、亦無及已」（『左伝』昭公二十年）、「作而後悔、亦無及也」（『左伝』哀公六年）、「則悔之無及矣」（『漢書』晁錯伝）といった典拠を踏まえている。また今日でも、「悔之無及」が慣用句となっている。

他の2例、「亦」と「又」、「云」と「曰」にしても、訓読みは同じになる。要は、いずれも日本語ネイティブによる誤写が疑われる。そもそもこれら3例は、まったく九牛の一毛に過ぎない。したがってこのテキストの性質解明もまた、今後の課題である。

いずれにせよ南方熊楠顕彰館に現在保存される『杜騙新書』は、これまで知られていた『杜騙新書』のテキスト（『「杜騙新書」訳注稿初編』、既出）と異なるタイプのものであることは確かであり、まことに貴重な文献であると言えよう。あらためて田辺市教育委員会と南方熊楠顕彰館の関係各位に感謝の意を表して筆をおく。

※本稿執筆にあたり JSPS 科学研究費補助金 15K02433、25370397 の助成を受けている。

#### 【付録】『杜騙新書』明刊本と南方本の異同

※明刊本の葉・面・行>>>南方本の葉・面・行（なお a はオモテ、b はウラ）

序

- 1 a 10 藁可為将>>> 1 a 9 （破れ）
- 1 b 1 巧何寸補於隙罅>>> 1 a 10 （破れ）
- 1 b 7 兔>>> 1 b 6 鬼、非。
- 1 b 8 謬>>> 1 b 8 僂、非。
- 2 b 3 鈎>>> 2 a 10 釣、非。
- 2 b 7 甘>>> 2 b 3 来？、非。
- 2 b 7 諳>>> 2 b 3 譜、非。
- 3 a 1 説林>>> 2 b 5 （ナシ）
- 3 a 5～6の間 >>> 3 a 8 （空1行）
- 3 b 7 序畢>>> 3 a 10 （ナシ）

目録

3 a 5 以下 (巻三・四) >>> (ナシ、5 a 10為止)

本文 (巻一)

1 a (扉絵) >>> (ナシ)

1 b 1 一>>> 1 b 3 (通算5 b 1) 上。

1 b 3 (空格) >>> 1 b 3 漢冲 張懷耿。

2 b 2 馬>>> 2 a 10 焉、似是。

3 b 2 遭>>> 3 a 8 曹、非。

4 a 1 詭>>> 3 b 6 説、非。

4 a 4 (蘇の異体字、この類は略、以下おなじ)

5 a 6 免>>> 4 b 9 兌、非。

5 a 9 開>>> 5 a 6 門、非。

5 b 9 下建字>>> 5 b 1 (白く塗って書き直し。以下必ずしも指摘せず)

7 a 4 智>>> 6 b 3 知、亦可。

7 b 1 柰>>> 6 b 9 李、非。

8 a 9 干>>> 7 b 6 于、非。

9 a 4~5 >>> 8 a 10 (空1行)

1 2 a 6 他>>> 1 1 a 6 地、非。

1 2 b 6 待>>> 1 1 b 5 侍、非。

1 2 b 7 工>>> 1 1 b 6 口、非。

1 3 a 1 工>>> 1 1 b 9 口、非。

1 3 a 9 在他>>> 1 2 a 7 他在、非。

1 4 b 4 群>>> 1 3 a 9 郡、非。

1 4 b 6 再>>> 1 3 b 1 舟、非。

1 4 b 9 悵>>> 1 3 b 4 帳、非。

1 5 a 3 便>>> 1 3 b 7 使、非。

1 5 b 5 未>>> 1 4 a 8 末、非。

1 6 b 3 計>>> 1 5 a 4 訃、非。

1 7 b 3 傾>>> 1 6 a 2 「丘+頁」、非。

1 7 b 8 字>>> 1 6 a 7 守、非。

1 8 a 5 敗>>> 1 6 b 3 敢、非。

1 9 a 4 脱>>> 1 7 a 1 0 (白塗り修整あり)

2 2 b 5 千>>>2 0 b 4 于、非。

2 3 a 8 末>>>2 1 a 6 未、非。

2 4 b 2 要>>>2 2 a 7 要、非。

2 4 b 7 便>>>2 2 b 2 使?、非。

2 5 b 3 (空格)>>>2 3 a 6 回、当従。

※『古本小説集成』影印本には「回」の字がある。

2 5 b 3 便>>>2 3 a 6 使?、非。

2 6 a 2 叙>>>2 3 b 4 (白塗り修整あり)

2 8 a 7 挑>>>2 5 b 5 桃、非。

2 9 b 4 且>>>2 6 b 9 且、非。(この類は数が多いため以下省略)

3 2 b 9 濟>>>2 9 b 8 齊、非。

3 3 a 1 下予字>>>2 9 b 9 宇、非。

3 3 b 9 打>>>3 0 b 6 折、非。

3 4 a 8 某>>>3 1 a 4 其、非。

3 5 a 3 反>>>3 1 b 7 歹、非。

3 5 b 2 干>>>3 2 a 5 于、非。

3 5 b 8 始>>>3 2 b 1 如、非。

3 6 a 9 籠>>>3 3 a 1 寵、非。

3 6 b 2 代>>>3 3 a 3 伐、非。

3 7 a 4 百>>>3 3 b 4 而、非。

3 8 b 1 下建字>>>3 4 b 8 (小字で補写、「張」の下1マス空格)

3 8 b 2 光>>>3 4 b 9 先、非。

3 9 a 9 一>>>3 5 b 5 上、非。

3 9 b 4 亦字>>>3 5 b 9 (「何」の上に、書き落としを補写か)

3 9 b 9 時>>>3 6 a 4 恃、非。

4 0 b 5 扮>>>3 6 b 8 粉、非。

4 1 b 1 備>>>3 7 b 2 「イ+若+卅」、非。

※写字生のレベルを窺い知れる例である。

4 1 b 4 苦>>>3 7 b 5 若、非。

4 2 a 4 聞>>>3 8 a 4 門、非。

4 2 b 5 若便>>>3 8 b 4 2マス空格。

4 3 a 5 子>>>3 9 a 3 乎、非。

4 3 b 9 飲>>>3 9 b 6 入、非。

- 4 4 a 5 悶>>>4 0 a 1 「門+必」、非。  
 4 4 b 6 曰>>>4 0 b 1 也、非。  
 4 5 b 5 睡>>>4 1 a 8 「目+乘」、非。  
 4 6 a 4 晝>>>4 1 b 6 盡?、非。(無「…」)  
 4 6 b 2 来>>>4 2 a 3 束、非。  
 4 6 b 4 搶>>>4 2 a 5 槍、非。  
 4 6 b 4 然後>>>4 2 a 5 (「使」の前、非 )  
 4 7 a 5 菓>>>4 2 b 5 華、非。  
 4 7 b 6 熱>>>4 3 a 5 (第二冊1 a 5) 之、非。  
 4 8 a 5 俗>>>4 3 b 3 「イ+各」、非。  
 4 8 a 7 金>>>4 3 b 3 銀、非。  
 4 8 b 5 一>>>4 4 a 2 上ノ〔の〕 ※日本人による書き換えか。

本文 (巻二)

- 1 a (扉絵) >>> (ナシ)  
 1 b 1 二>>>1 b 1 (通算2 b 1) 下。  
 1 b 3 (空格) >>>1 b 3 漢冲 張懷耿。  
 2 a 8 辦>>>2 a 7 辨。  
 3 a 2 干>>>2 b 9 于、非。  
 3 a 9 孰>>>3 a 6 熟、非。  
 3 b 8 丰>>>3 b 4 手、非。  
 5 b 4 苦>>>5 a 6 若、非。  
 5 b 5 苦>>>5 a 7 若、非。  
 6 a 1 干>>>5 b 2 于、非。  
 6 a 2 侍>>>5 b 3 待、当従。  
 6 a 7 柰>>>5 b 8 李、非。  
 7 b 9 苦>>>7 a 7 若、非。  
 8 a 4 却>>>7 b 1 劫、非。  
 8 b 3 郡>>>7 b 9 (「茲」の下に移動)  
 8 b 7 苦>>>8 a 3 若、非。  
 8 b 7 且>>>8 a 3 且、非。  
 9 a 7 短>>>8 b 2 知、非。  
 9 b 4 何>>>8 b 8 可、非。

9 b 6 挺>>>8 b 1 0 捉、非。  
1 0 a 1 卿>>>9 a 4 郷、非。  
1 0 a 3 忿>>>9 a 6 怒、不従。  
1 0 a 3 却>>>9 a 6 劫、非。  
1 0 a 7 滅>>>9 a 1 0 臧、非。  
1 1 a 1 頭一字僅有下半「貝」>>>1 0 a 2 (空格)

※『明清善本小説叢刊』『古本小説集成』影印本は「賢」、従うべし。

1 1 a 1 催>>>1 0 a 2 催、非。  
1 1 a 2 干>>>1 0 a 3 干、非。  
1 1 a 4 其?>>>1 0 a 5 甘、是。  
1 1 b 6 虐>>>1 0 b 6 雪、非。  
1 2 a 8 辟>>>1 1 a 7 避、非。  
1 2 b 2 舟>>>1 1 a 1 0 船、不従。  
1 2 b 2 皆敵>>>1 1 a 1 0 (2マス空格)  
1 3 a 2 道>>>1 1 b 9 通、非。  
1 3 b 4 飯>>>1 2 a 1 0 飲、非。  
1 4 a 6 上于字>>>1 3 a 1 干、非。(!)  
1 4 b 4 牙角>>>1 3 a 8 角牙、非。

※按ずるに「牙」の下に「人」の字が付いていれば更に良い。

1 5 a 3 売>>>1 4 b 6 買、非。  
1 5 b 9 丫>>>1 4 b 1 了、非。  
1 6 a 8 乘>>>1 4 b 9 垂、非。  
1 6 b 5 丫>>>1 5 a 5 了、非。  
1 7 b 9 典>>>1 6 a 7 興、非。  
1 8 a 3 槓>>>1 6 a 1 0 用「亻」、非。  
1 8 a 5 値>>>1 6 b 2 価、不従。  
1 8 a 8 難以>>>1 6 b 5 (後人が書き改めたもの)  
1 8 b 8 船去半>>>1 7 a 4 (空格)  
1 9 a 2 杏>>>1 7 a 7 杏、当従。  
2 0 a 3 佑>>>1 8 a 6 估、非。  
2 0 a 8 且>>>1 8 b 1 旦、非。  
2 0 a 9 買>>>1 8 b 2 売、非。  
2 0 b 4 刁>>>1 8 b 6 刀?、非。

- 20 b 9 除>>>19 a 1 徐、非。
- 21 a 2 枉>>>19 a 3 汪、非。
- 21 a 3 打>>>19 a 4 折、非。
- 21 b 1 太>>>19 b 1 大、非。
- 22 a ~ b >>> (19 b 9・10相当部分が原缺)
- 24 b 7 史>>>21 b 3 吏、非。
- 25 b 5 為>>>22 a 9 (空格)
- 26 a 8 苦>>>23 a 1 若、非。
- 27 a 7 少>>>23 b 8 小、非。
- 27 b 6 本>>>24 a 6 木、非。
- 28 a 5 問>>>24 b 4 間、非。
- 29 a 5 以>>>25 b 2 意、非。
- 29 a 7 口>>>25 b 4 到、非。
- ※「到」の右上に補足して、とても小さく「口」が書かれている。
- 29 b 2 達>>>25 b 8 (空格)
- 29 b 7 怒>>>26 a 3 怒、非。
- 29 b 8 院>>>26 a 4 陳、非。
- 30 a 2 苦>>>26 a 7 若、非。
- 31 a 3 ㄚ×2>>>27 a 6 了×2、非。
- 31 a 7 思>>>27 a 10 四、非。
- 31 b 3 覽>>>27 b 5 賢?、非。
- 31 b 9 更>>>28 a 1 叟、非。
- 32 b 5 苦>>>28 b 5 若、非。
- 33 a 4 取>>>29 a 3 収、非。
- 33 a 6 擅>>>29 a 5 檀、非。
- 35 a 2 苦>>>30 b 7 若、非。
- 35 a 4 干>>>30 b 9 于、当従。
- 35 a 5 胡>>>30 b 10 故、非。
- 35 b 5 干>>>31 a 9 于、非。
- 36 a 3 侯>>>31 b 6 候、非。
- 36 a 8 可>>>32 a 1 何、非。
- 38 a 2 「査」の上に1マス空格、「賊」の下に空格無し。
- >>>33 b 1 「査」の上に空格無し、「賊」の下に1マス空格。

- 38 a 7 戊>>>33 b 6 戊、非。  
 40 a 1 允>>>35 a 6 (「允」は修正を加えている)  
 40 a 6 歡>>>35 b 1 觀、非。  
 ※「觀」のうちの「見」は後から付け足したようである。  
 40 b 9 亦>>>36 a 3 又、不従。  
 41 a 4 院>>>36 a 7 在門字下、非。  
 41 b 4 郎>>>36 b 6 即、非。  
 41 b 8 丁>>>36 b 10 下?、非。  
 42 a 7 云>>>37 a 8 曰、不従。  
 42 a 8 貨>>>37 a 9 家、非。  
 43 b 2 無>>>38 a 10 不、非、  
 43 b 6 苦>>>38 b 4 若、非。  
 44 a 6 埋>>>39 a 3 帶、非。  
 45 a 2 同>>>39 b 7 (何らかの修正がなされているようである)  
 45 a 6 厚>>>40 a 1 原、非。  
 46 a 5 宄>>>40 b 8 究、非。  
 46 a 9 述>>>41 a 2 还(=還)、非。  
 50 a 9 分>>>44 b 4 錢、非。  
 50 b 4 結>>>44 b 8 「糸+告」、非。  
 51 b 3 細>>>45 b 5 彩、非。  
 51 b 5 上仔字>>>45 b 7 好、非。  
 52 b (匡郭外)  
 >>>46 b 8~9 万曆丁巳歲正月吉旦／書林漢冲張懷耿梓  
 ※この2行は明らかに別人が書いたと思われる。

(閻小妹 信州大学 全学教育機構 教授)

(氏岡真士 信州大学 人文学部 准教授)

2016年1月26日受理 2016年2月8日採録決定